

みくに のぞみ作「脱出の道」

桃花	中橋文	清水先生(担任)	東裕之
父	中尾隼人	教師	畠山裕樹
母/美沙希	野村佳代	校長	小川政弘
真矢/ママ友	大橋めぐみ		

桃花 真矢、おはよう！

真矢 おはよう、桃花。今朝も寒いね～。昨日、宿題やりながら寝ちゃってさー。朝起きたらベッドの上にちゃんと寝てた。あれって、不思議だよねえ。いつ移動したか全く覚えてないんだよー。

桃花 で、宿題は終わったの？

真矢 朝シャワー浴びて、そのあと急いでやったよー。

桃花ナレーション 私は中村桃花。青春中学の3年生。父と母はクリスチャンで、私も生まれた時から両親に連れられて毎週教会に通っている。両親は優しく、勉強のこともあまりうるさく言わず、「あなたの人生なんだから、自分で責任を持って、やりたいことをやりなさい」と言ってくれる。自分でいうのも何だけど、私は恵まれてると思う。同じマンションに住む親友の真矢は、私と同じ一人っ子で、私たちはまるで双子のようにいつも一緒にいる。私はクラスの中で特別目立った存在ではないが、中学校生活は充実していてとても楽しい。もちろん定期試験や受験がなければ、もっと楽しいだろうなどは時々思うけど。そんなある日、あれは、今から2か月前の12月のできごとだった。…

桃花 (モノログ) あれ～？ おかしいなあ。

桃花ナレーション 5時間目の授業は体育。私はクラブ室で体育着に着替え、まだ時間があつたので、15分ほど図書室で、冬休みに課題研究に使える参考書を物色した。戻ってくると、異変が起きていた。着替えの服はあるが、ジャージの上下が見当たらないのだ。

桃花(モノログ) どうしたのかなあ。確かに着替えと一緒に置いといたのに。あ～～もうすぐチャイム鳴っちゃうし…しょうがない、あとで探そう。

ナレーション 私は寒風の中、半そでの体育着姿で授業に参加した。みんなの「桃花どうしちゃったの？ 無理しちゃって」みたいな視線を感じて、なんとも気まずかった。このなくしものをどう処理しようか迷ったが、放課後、意を決して教員室に行き、担任の清水先生に相談した。

清水先生(担任) 誰かが間違っって持ってるんじゃないのか？ ならすぐ気づいて返してくるさ。名前が書いてあるから大丈夫だろう。

教師 清水先生、そうですよ。うちのクラスでも、この間そんなことがありましたよ。

清水先生 そうですか。ま、うちの学校に限って、人の物を盗むたちの悪い生徒はいませんよ。

ナレーション 私も内心、“そうならいいけど”と思ったが、私の期待に反して、次の日も、その次の日もジャージは出てこなかった。そしてまた次の体育の時間がやってきた…。

真矢 桃花、今日も半そで短パンなの？ それって新しい健康法とか？
桃花 違うよ。3日前、ジャージないって話したじゃない？ まだ見つからないの。
真矢 えー、マジ？ そりゃ困るね。隣のクラスの女子とかで間違えて持ってる子いないかな？
桃花 うーん。名前の刺繍があるから、もしそうならすぐ気づくと思うんだよね。
真矢 受験生なんだから風邪ひかないでねー。まさか、桃花と同じ高校受ける子が桃花を落とすためにジャージを隠したとか…(笑)
桃花 そんな人いたら、かなりヤバくない？
桃花と真矢 (笑)
桃花モノローグ あーあ、ほんと、どこいっちゃったんだろ。早く見つけなきゃ。困ったなあ。
ナレーション けれど、ジャージは一向に見つからないまま1週間たった。両親にも話したが、その反応はこうだった。
父 ほんとにちゃんと探したのか？ 家にあつたりしないか？
母 そうよ。「実は家にありました」、なんてお母さん、恥ずかしいわよ。
桃花 それはないよ！ あの日、午前中の陶芸の授業の時にはちゃんと着てたもん。
母 そう…。変ね。まさか、誰かの嫌がらせ？ 何か人に恨まれるようなことした？
桃花 してないと思うけど、そんなの分からないよ。
父 真冬の最中にジャージないと困るだろ。今日、買いに行くか？
母 そうねえ…。でも、もうすぐ卒業ってときに、新品のジャージ買うの、なんか悔しいわね。
父 よし、とにかく神様に祈ろう。神様は全てご存じだ。
母 そうですね。そうしましょ。さ、桃花も。
ナレーション 「はい」と小さい声で言っただけお祈りしても、神様聞いてくれるかなあ」という思いが、ちらりと心をかすめた。
父 神様、どうか桃花のジャージが見つかるように助けてください。
母 神様、どうぞ桃花にジャージをお返してください。このことに、何か神様のご計画があるなら、それを示してください。イエス様のみ名によってお祈りします。
両親、桃花 アーメン。
母 桃花も、自分で神様にちゃんとお祈りするのよ。お母さん、明日の保護者会でお友達のママたちにそれとなく聞いてみるね。
桃花 えー、いいよ。そんなこと聞かなくて。
母 何言ってるの～。買ってから見つかっても困るじゃない。ジャージいくらすると思ってるのよ。上下で1万円以上するんだからね。
ナレーション 次の日、母は、言っていたように保護者会でお母さんたちに相談したそう。そしたら、みんな心配してくれて、女子の着替え場所でなくなったのに、男子のお母さんたちもロッカーの中を探してくれたそう。母が「相談してみる」と言った時は、正直恥ずかしかったが、こうして大人の人たちが、私のジャージのことで真剣に探してくれてると知ると、素直にうれしかった。
翌日の土曜日、家族で朝食を食べている時のこと。
効果音 (電話の鳴る音)
父 もしもし。はい。そうなんですよー。まだ見つからなくて。え?! 本当ですか？ ありがとう

ございます。助かります。

ナレーション

電話の相手はクラスメイトの鈴香のお母さんだった。昨日の話を聞いて、家に余っているジャージを貸してくださるとのことだった。

母

鈴香ちゃんのお母さん、本当に親切ね。助かったわ！ あー、神様、感謝です。

ナレーション

私も思わず、「神様ありがとう」と心の中で叫んでいた。これで、新しいのを買うため母に負担をかけずに済む。でも、私のジャージが消えたままという事実には変わりはない。その後も、私は時間があれば探した。心のどこかには、“誰かが意地悪をして隠したのかもしれない”という思いがあったが、小さい頃から、「人を疑ってはいけない」と両親に教えられて育った私は、その思いを打ち消すように、他の教室も隅々まで、またクラブ室の掃除当番のときは、とりわけ念入りに探した。しかしジャージは、依然として行方が知れないまま、冬休みになった。

音楽

(クリスマス音楽 CD)

ナレーション

クリスマスも迫ったある日、我が家では、恒例のクリスマスパーティーが開かれた。私がまだ小学低学年だったころから、もう 10 年ぐらいは続いている。両親は、そのパーティーに、その年々の私のクラスのお母さんたちを招待するのだ。20 人以上の人が集うパーティーで、母は 1 週間も前から料理作りが大変だ。父の役目は、短いクリスマスメッセージをすること。内心、“なんでそんな大勢の人を招くのかなあ”と思うのだが、そうやって、イエス様のことを伝えるのが、何よりの喜びなんだそうだ。

母

ディナーが終わり、お母さんたちが、クリスマス CD を聴きながら、ティータイムの歓談中のことだった。母が改まったようにテーブルから立ち上がって、ジャージの話を始めた。夫も私も、卒業直前にこんなことが起きてしまって、暗い気持ちになってしまったんだけど、クラスメイトのお母さん方の優しさを知ってすごうれしかったです。改めて、心から感謝します。私たち、これは神様からの試練かもしれないって思っています。聖書の中に、こんな言葉があるんです。あなた、お願い。

父

うん。『あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせることにはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。』(第1コリント10:13)

ママ友1

神様からの試練…。なるほどね。私たち、そんな風に考えることってあんまりないけど、もしそうなら、きっと神様は、解決の道も見つけてくれるんじゃない？

ナレーション

私は両親の話を聞きながら、ひよっとして、今年のパーティーは、お礼と共に、その話があったのかもしれないと思った。

桃花(モノログ)

「脱出の、道」か…。でも、どうやって、抜け出せるのかなあ。

ナレーション

間もなく年が明け、短い冬休みも終わって、3 学期が始まった。そして、いつしかジャージのことは忘れかけていた頃、その日はやってきた。2時間目の授業が終わるのを待ちかねたように、真矢が、私の机のところに飛んできたのだ。

真矢

桃花、今度は私よ！ 筆箱がない！

桃花

え？ 家に忘れてきたんじゃない？

真矢

桃花と違って、私が忘れ物しないの、知ってるでしょ？ 1 時間目の時はちゃんとあった。

鉛筆使ったもん。どこ行っちゃったんだろ。困ったなあ。

桃花

とりあえず、私のシャーペン貸したげる。でも、それって、ちょっとヤバイよ。

真矢

うん、ヤバいかも。

ナレーション

私は、忘れかけていた自分のジャージのことを思い出していた。これはもう、誰かが故意に隠したとしか思えない。黒い、もやもやした思いが、すごい勢いで心の中に広がった。

3 時間目は音楽の授業だったので、休み時間に皆、音楽室へ移動した。私はうっかりリコーダーを教室に置いてきてしまったので、急いで教室に取りに戻った。

桃花(モノローグ)

あれ？ 誰かまだ教室にいる…。

桃花

(驚いて)ちょっと、美沙希ちゃん！ 何してるの?! それ、真矢の筆箱じゃない?!

ナレーション

まさかの光景を目にしてしまった。クラスの中でまじめでおとなしい美沙希が、真矢の筆箱をゴミ箱に捨てていたのだ。私は急いで筆箱を拾って中を開けてみると、シャープペンや定規がバリバリに折られていた。

桃花

美沙希ちゃん、どうして？ ひどすぎる！ 真矢に話すわよ。あと先生にも言うからね！

美沙希

そんなことしたら、私、ここから飛び降りる！

桃花

はあ?! ふざけないでよ。死んじゃうよ！

美沙希

本気よ。こんなことしたって知られたら、生きてられない。

桃花

だったら、なんでこんなことしたのよ！

美沙希

どうせ、私なんていないほうがいいのよ。

ナレーション

私は気が動転していた。

桃花(モノローグ)

この事態をどうしたらいい？ 美沙希がほんとに窓から身を乗り出したら、どうしよう？

ナレーション

それでも、頭の片隅では妙に落ち着いていて、「きっと大丈夫。神様が何とかしてくれる。」と考えている自分が不思議だった。これまで、いつも両親や教会の先生に聞いていたのに、あまり真剣に考えたことがなかったけど、今、神様の存在が、なんか、急に身近になった。

桃花

美沙希ちゃん、とにかく保健室に行こう。落ち着こうよ。

ナレーション

私は、深呼吸をして、とにかくそう言うのが精いっぱいだった。「死ぬ」と口走っていた美沙希だったが、意外にも素直に保健室まで一緒に行ってくれた。養護の先生に事情を話すと、先生は、校長室に連れてってくれ、私は美沙希と一緒に校長先生とお話することになった。

校長

ふ〜ん、そうだったのか。いや、先生、美沙希ちゃんのこと、なんにも知らなかったなあ。お母さんが、美沙希ちゃんが小学4年の時だっけ、酒を飲んで暴力を振るうお父さんと離婚し、美沙希ちゃんが小学6年の時に再婚した。そして中1の時に、新しいお父さんとの間に妹が生まれた。妹さんももうすぐ2歳だよ。名前はなんて言うの？

美沙希

ありさです。

校長

ありさか。いい名前だね。で、そのありさちゃんをかわいがって、自分のことをほとんどかまってくれなくなった両親を見て、自分がいないほうが家族3人幸せなのではないかと、疎外感を感じていた…。

美沙希

はい。新しいお父さんは、別に私のことを嫌いじゃないってことは分かってました。母も、

前のお父さんのことでほんとに大変だったので、何よりも優しい人を求めてみたいんです。その点では、いつも優しくしてくれる人に出会って、良かったなどは思ってるんです。そうか。そのことはほんとによかったね。お母さんの心の傷も、少しずつ癒やされていくといいね。でも、美沙希ちゃん、新しいお父さんのこと嫌いじゃなくて、お母さんのことも、心では“良かった”と思ってるのに、どうして盗みなんかをするようになったのかな？ 確か去年の春に、生まれて初めて店で万引きをした。そのあと、教室でも文房具を盗んだ…。

校長

美沙希

はい。初めての万引きの時は怖かった。心臓が破れるかと思うほどドキドキしました。でも、一度盗みをすると、“もうどうでもいい”って気になりました。ジャージの時は誰のものでもよくて、たまたま桃花ちゃんのが目の前にあったんです。気がついたら自分のカバンの中に突っ込んで、下校途中、森の中に捨てました。桃花ちゃん、ごめんなさい。

桃花

え？ 私のも、美沙希ちゃんだったの？ 森の中か…。どこ捜してもないわけだね。

ナレーション

そこまで言うてから、私は美沙希のほうを見てはっとした。今にも泣きそうな目だった。

桃花

あ、うん、大丈夫、平気。ジャージの場所が分かったから、もういいよ。それより、真矢の筆箱は、お母さんが買ってくれたばかりの新品だったんだよ。校長先生も聞いたように、なんでずっとそんなこと続けたの？

美沙希

一目見て、新品だと分かった。その時、“自分の筆箱はもうボロボロなのに、お母さんは気づいてくれない”と思ったら、なんか無性に腹が立って、自分が抑えられなくなり、気がついたら筆箱の中身を足で踏みつけ、教室のごみ箱に捨ててた…。そこに、桃花ちゃんが入ってきた…。

どうしてかって聞かれると…。自分でもうまく言えないんだけど…。なんか、心の中がどうしようもないストレスでいっぱいになってた気がします。

校長

うん、ストレスか。先生にも少しは分かるな。私にも今大学生の息子がいるんだが、ちょうど美沙希ちゃんぐらいの時に、同じようなことをして、ちょっと大変な時があったからね。

美沙希

え？ そうなんですか？

校長

ああ。息子の場合は、何かというと、“校長の息子”ということで、いい子でいることを無言のうちに求められるのが、たまたま嫌で、悪さをして親を困らせたかったんだそうだ。あの子も、まさにストレスの中で苦しんでいたのに、私はそのことに気づいてやれなかった。いやお恥ずかしい、教育者失格だ。

桃花

校長先生…。

美沙希

やっぱり私、寂しかったんだと思う。妹は赤ん坊だから、母も父もお世話で大変なのは当たり前なのに、私はいつも自分のことばかり考えてた。新しいお父さんにも、もっと私のこと分かってほしかったのに…。でも、あのお父さんだから、きっと遠慮してたんだと思います。私って、まるで子供みたい。頭では両親のことも、盗みは悪いことだということも分かっていたながら、たまったストレスをどこかで吐き出したかった。ただ楽になりたかった。

校長

分かっていたのはそれだけじゃない。“悪いことは、いつかは明るみになる”ということもだろ？ でもそれならそれで、親も自分のほうに目を向けてくれるかもしれない…。

美沙希

え？ どうして…分かるんですか？

校長 (笑)これも息子に聞いたんだよ。いずれにしても、よく正直に話してくれたね、美沙希ちゃん。大丈夫、そうやって、自分の心の中をきちんと整理して理解できるのは、もう子供ではないという証しなんだよ。さあ、桃花ちゃんも赦してくれたし、あとはどうするか、分かるよね？

美沙希 はい、真矢ちゃんにも謝って、壊したものは弁償します。それから、もしできたら、桃花ちゃん、私と一緒に、ジャージを捨てた場所に行ってくださいか？

桃花 え？ うん、いいよ。なんか、ちょっと怖いけど…。(笑)

美沙希 それと…。

校長 うん、それと？

美沙希 もうすぐ、ありさの 2 歳の誕生日なんです。お小遣いで、あの子の喜ぶおもちゃを買ってあげます！

桃花 すてき！

校長 うん、それはいい。ありさちゃんも喜ぶだろうが、一番うれしいのはご両親だと思うよ。

ナレーション 校長室をあとにした私は、美沙希と二人、彼女が私のジャージを捨てたという森に向かった。あれからもう2か月近くたって。もうよれよれで使えないかもしれない。でもいい。今の私には、なくなった物が見つかったことより、美沙希の心が、新しい道に歩み出したことのほうがずっとうれしいのだから。

桃花(モノログ) あれ？ これも、ちょっぴり大人になった証拠かな？

ナレーション 私は独りで「くすっ」と笑った。家に帰ったら、両親に全て話してあげよう。二人の喜ぶ顔が目に見えそう。そして、「やっぱり神様は、脱出の道を備えていてくださった」と言うだろうことも。そうか、これが、神様が私にも、そして美沙希にも備えてくれた、“脱出の道”なのだ――。

完